

別紙様式3

平成29年度 第1回 地域連携による活力ある高校づくり推進協議会 議事要旨

日 時	平成29年 5月31日(水) 13:30~16:00
場 所	吉城高等学校 会議室
出席者 (敬称略)	<p>布俣 正也 岐阜県議会議員 都竹 淳也 飛騨市長 山本 幸一 飛騨市教育委員会 教育長 向川原真郷 古川中学校長 三橋 浩之 国府中学校長 田中 晶洋 ブライトスタッフ(株)代表 渡辺 正憲 (株)飛騨ダイカスト代表取締役 岡山 正喜 アルプス薬品工業(株)取締役総務部長 池田理佳子 ハッ三館女将 松場 慎吾 合同会社 hidaiyo 共同オーナー、旅ジョブ代表取締役 関口 祐太 (有)関口教材店、チームフロー認定メンタルコーチ 川上 佳洋 「夢のたまご塾」飛騨アカデミー実行委員長 仲島 豊 吉城高校育友会長 上臺 勇 吉城高校同窓会長 石原 典子 学校評議員(民政委員・主任児童委員) 稲葉 佳代 学校評議員(主婦) 尾賀 眞平 学校評議員(尾賀書店) 後藤 洋平 学校評議員(青年会議所理事) 洞 宏樹 学校評議員(卒業生の保護者) 布施 明彦 岐阜県教育委員会 総務課長</p> <p>以下、学校関係者 鈴木 健 吉城高等学校 校長 細江 雅紀 同 教頭 秋月 正幸 同 事務長 下嶋 和長 同 生徒指導主事 藤守 学 同 進路指導主事 小澤 耕 同 活力ある高校づくりワーキンググループ長 小原 誠 同 教務主任(記録)</p>
議事概要	<p>1. 学校の現状について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・YCK(吉高地域キラメキプロジェクト)などで中学と高校の連携が進むなどよい方向に流れている。古川祭のボランティアなど魅力的な活動が増えた。地域に大切な高校であり、応援団の方々を増やしていただきたい。 ・積極的な学校のPRなど、昨年度の評議員会で提言したことが少しずつ定着してきてありがたい。さらに地域の方々のYCKへの認識が高まるといい。 ・毎年、理数科は理系学科だけでなく、大学進学クラスとしてのカリキュラムを組み、中学生に広報している。今年度は静岡大学法学部に進学した生徒がいる。 ・生徒たちの熱心なYCKプロジェクトに魅力を感じている。古川祭は平日であり、高校生は授業に参加するため、その3年間は地域と隔離されてしまう。 ・吉城高校の地域の評判はよい。ただし、国府の生徒が吉城を選択しなくなってい

る。もっと保護者に向けての情報発信が必要ではないか。理数科は特進科など、保護者にもイメージが伝わる名称がよいのではないか。

- ・理数科は理数のイメージがあり進学クラスであるとの認識がまだまだ低い。「特進」は吉城の特色として売りになると思う。バス代も安くなったので、もっと神岡からも生徒に通ってもらえるのではないか。「小学生サイエンス教室」の案内が神岡小学校には来ていない。古川の小学校だけでなく飛騨市全域に広げてはどうか。
- ・進学率が高くなり、若者が外に出るため、地域の労働人口が減っている。YCKの活動によって、地域の大人が高校生に夢を与えられるように期待する。地元に戻って就職するようなルールが敷けると良い。生徒は真面目で良い子たちだが、大人にとって都合のよい子ではなく、伸び伸びと企業ともっと密着してもよいのではないか。
- ・真面目でよい生徒は、世間に出てだまされてしまう。世間で揉まれるような活動も経験させるとよい。高校生にとって、就業体験としてのアルバイトはある意味よい体験だと思う。大人や地域が見守る中で、経験を積みながら、多くの生徒に地域のことを知ってもらうような取組はできないか。

2. 今後の課題について

- ・少子化が進む中で、吉城高校の志望者が増えることは、他校の志望者が減ることでもある。中学生の取り合いはいかなものか。交通の便が良いところに生徒が進学するのは当然なこと。生徒数が減ることに何か問題はあるか。
→（学校より）生徒の奪い合いではなく、それぞれの高校が魅力ある学校になるよう努力することが、地域全体の教育の質を高めることになると思う。ただ一方で、（これは個人的な見解だが）学校規模が小さくなることは、部活動の団体種目の活動等に支障があるものの、授業などでは一人一人に目が行き届くなど、必ずしもマイナス面ばかりではないとは感じている。
- ・飛騨市は魅力ある都市であり、観光は大切な地域産業。いま進めていこうとしているYCK活動を、先輩、後輩の関わりを持って、世代を超えて続けて欲しい。中学生への高校説明会は、先生のプレゼンテーションの質で随分イメージが変わるので、上手な先生に説明して欲しい。
- ・YCK活動のPRはどこを見て発信しているのか。地域ありきの発想が果たして中学生に伝わるか。飛騨地域の外に出ることで初めて地域の魅力が分かり、飛騨のよさを発信できる部分もあるのではないか。また、海外の大学のように2年生の先輩が1年生の世話をする「チューター制度」のようなシステムを取り入れてはどうか。
- ・メンタルコーチとして、吉城高校の先生方や生徒が地域の方々との触れ合いをコーディネートしている。こういう「メンター制度」的な支援の中でYCKのプロジェクトリーダー達はプレゼンを経験したり、人の役に立つ喜びを味わっている。

3. 中学校との連携について

- ・中学生と高校生が共に関われる古川祭英語観光案内ボランティアをより充実させたい。高校の授業はどうしても講義形式になりがちである。子どもたちが自分たちで学ぶ取組を共に行い、生徒を育てていきたい。
- ・中学生は進路を自分で選択する力がまだ弱い。進学か就職か部活かで単純に高校を選ぶ傾向があり、高校の情報や取組をいかに上手に伝えるかが大切。専門高校が行なう2月の「飛び出せスーパー専門高校生」で発表する生徒の姿は魅力的で

あった。生き生きとした発表で、生徒がその高校に行きたいと思える説明であった。また、人材を地域に還元するといっても、戻っても働く場所がなければ意味がないので、その部分と同時に進める必要がある。

- ・吉城高校は来年度 70 周年を迎える。熱心に教えていただいている先生方の姿を見て、今後も自信を持って指導していただきたいと感じている。
- ・地域との繋がりを考え、古川祭を学校の休業日に振り替えてはどうか。また、部活の試合の情報をメールで配信するなどし、先生方も応援に参加していただけると、生徒たちは大変喜ぶ。また、高校説明会では高校生に何を身に付けさせたいのか、学校の方向性を話して欲しい。

4. 今後の活性化の方向性について

- ・吉城高校は何を目指しているのか。もし単位制にする場合その魅力は何か。インターシップに意義は何か。YCK の授業での位置づけは可能か。理数科はいまのニーズに答えているのか。理数科と普通科の「くくり募集」はできないのか。こうした疑問に向き合い、たくましい人材を育てて欲しい。今後、飛驒アカデミーも吉城高校との関わりを考えていきたい。
- ・吉城高校の入学生が減少してきたここ何年かは、実は飛驒市出身の中 3 生の数はそれほど減っていない。入学者数減少の原因は、高山市内からの入学者が減ったことと、昨年、今年の 2 年間、古川中の生徒が飛驒神岡高校に多く進学したこと。その理由をしっかりと分析する必要がある。
- ・YCK プロジェクトは地域をフィールドにした「キャリア教育」であり、そこで学んだ生徒が、将来、地域に戻って活躍することを期待するものだが、それを正面から打ち出しても、子どもたちに魅力は伝わらない。吉城高校に入学することで、将来が広がるようなコンセプトづくり、マスコミが取り上げるような楽しいことや面白い取組を発信していくことなど、効果的な広報を工夫する必要がある。
- ・吉城高校と飛驒神岡高校は、県にお金を出していただける「市立高校」という認識。地元の高校の活性化は、もっと前からやるべきであったことで、いま遅ればせながら取り組み始めたところである。今後、飛驒市にも協力できることがたくさんあると思われる。

※ 簡条書可。枠は必要に応じて拡大または縮小いただいて結構です